研究報告

貝原益軒における「陰陽」概念

田　畑　真　美

富山大学人文科学研究第 77 号抜刷
２０２２年８月

研究報告

貝原益軒における「陰陽」概念

田　畑　真　美

一，問題の所在

本稿の目的は，江戸前期の儒学者貝原益軒（1630-1714）における「陰陽」概念を分析することにある。思想史上益軒は，朱子学から古学への流れの上に位置付けられる。益軒の立ち位置をめぐっては確かに，朱子学を批判してはいるもののそれは依然として朱子学に内在したものであるという指摘もある。[1)] しかしながら，朱子学の世界観の根幹を支える「太極」や「理」・「気」，「陰陽」等の概念を，聖人の書とされる『易経』の正確な解釈を試みることによって聖人の捉えた諸概念を厳密に規定しようとしたその姿勢は，古学に連なるものであると言えよう。[2)]

本稿ではそうした益軒の姿勢を踏まえ，益軒の最晩年の著書『大疑録』，『自娯集』巻之一所収の「陰陽論」をはじめとする小論を中心に，『養生訓』の中の記述も適宜参照しつつその「陰陽」概念を明らかにしていく。『大疑録』は言うまでもなく朱子学理論に対する益軒自身の真摯な取り組みの賜であり，真の知の探求が目指されている書物である。したがってそこで示される「陰陽」概念は，朱子学の解釈と比されつつ『易経』をもとに読み解かれている。その解釈は益軒が，後世にその是非の検討を譲ることをもくろんでいるにせよ[3)]，最終的に到達した地点であると言える。また『自娯集』は同じく最晩年の益軒の文集であり，自ら娯（たの）しむというその名称から察するに，学ぶこと，思索することそのものを純粋に楽しんだ益軒の姿勢が存分に感じられる書である。[4)] したがってこの文集の小論には，益軒が啓蒙的な意図で数多く編んできた教訓書から汲み取れる以上の，益軒自身の考えや立場が色濃く表れていると言える。また『養生訓』も最晩年の著書であり，ここでは人間存在が自分の心身を主体的に「養生」するという観点から，「陰陽」概念について触れられている。以上の文献を元に考察することで，益軒が最終的に到達した「陰陽」概念について明らかにすることが可能になると言える。

なお，「陰陽」概念をことさら取り上げるのは，その概念が端的に人間存在を含めた万物のありようを規定するものだからである。『易経』にせよ朱子学的世界観にせよ，人間存在が身を置くこの世界の成り立ちや取り決めのみに留まらず，人間存在そのものの生のありようを「陰陽」概念によって説明していると言える。そしてこの概念の探究はひいては，「天」と「人」との関わりを明らかにする手がかりにもなりうる。それは，マクロコスモスとしての「天」そのものとその性質を受け持つミクロコスモスとしての人間存在との交感を描きだすことにも繋がる。換言すれば内在する超越，といった哲学的・倫理学的に壮大なテーマを検討する一助と

もなり得よう。

二,『大疑録』における「陰陽」概念

具体的な考察に移ろう。まず注目したいのは,終始益軒が,『易経』繫辞上伝の一節を「陰陽」概念解釈の柱としていることである。それは『大疑録』のみならず,後に触れる「陰陽論」(『自娯集』)においても同様である。ここではまず『大疑録』での議論を整理することとする。

その一節とは「一陰一陽之謂道」(『易経』繫辞上伝p.220)[5] である。益軒はこの一節を軸とし,『易経』の様々な箇所を組み合わせて「陰陽」概念を位置付けていくが,ここが軸となるのはここがまさに世界観の要となる箇所だからである。益軒はここで観念的な「太極」という窮極概念を根底に置く朱子学を批判しつつ,「道」とは「陰」と「陽」の気の動きそのものであるという。

> 蓋道猶路也,以所通行名之焉,是一気之所流行,故名之曰道,所謂一陰一陽者,以一気之動静,一為陰一為陽,交流行而不息言之也,(『大疑録』巻之下p.403)

ここで益軒は,「道」を抽象概念ではなく単純に「道路のようなもの」[6] であり,「一気」が「陰」と「陽」とに分かれて流行していることを指すと言う。つまり「陰」と「陽」の動きそのものが「道」なのである。「陰」と「陽」を当初「一気」であるとする解釈は,朱子学と益軒とを大いに隔てるところである。続く箇所で益軒は,「陰」と「陽」が分かれず「混沌」の状態にあり,いまだ動いていないことを「太極」であると言う。「太極」は事象を背後で支える観念的な「理」ではなく,「混沌」とした「一気」なのである。そしてそれは,「陰」と「陽」が流行している場合を指す「道」という概念と同一であるとする。「太極」すなわち「道」なのである。[7]

重要なことは,「陰」と「陽」とを常に運動しているものであるとする点である。その無窮の運動とは,端的には万物の生成であった。益軒はこのことについて,『易経』繫辞下伝の「天地大徳曰生」の文言に基づいて説明する。「天地之間,都是一気,而以其動静称之為陰陽,其生生不息之徳謂之生,故易曰,天地大徳曰生」(同pp.403-404)というのである。ここから,「陰」と「陽」の働きは「天地」の生成という働きを体現するものであり,したがって「天の道」=「陰」と「陽」の「道」[8] ということにもなるのである。このようにさしあたり「陰」と「陽」は,万物の生成を受け持つ「天の道」であると言うことができる。

「天の道」の内実を見る前に,改めて益軒の言う「道」の意味を確認しておく。「道」について益軒は次のように述べる。

蓋二気之流行，有条理而不乱，常而正者，名之為道，是二気之本然也，紛乱而不正者，不可以為道，因非本然也（同p.403）

ここでは,「陰陽」の動きに筋目があり乱れがないことが「道」とされている。つまり「陰陽」の動きの正しさが「道」なのである。さらに注意したいのは，ここで「本然」という語が使われていることである。「本然」とは本来的なありかたを意味する。益軒は「陰陽の流行」の「純正」（同）なるものが「道」であるという言い方もしているが,「本然」や「純」という文言から,「陰陽」の本来的なあるべきあり方が「道」として規定されていることが分かる。その具体的な例示が続く箇所にあるが，それは「天の道」の然るべきありようを語っている。それを見ると，正しいとされていることの内実が明白となる。「如春温夏熱秋涼冬寒，是其常而正者，為天之道」（同）というように，夏は暑く冬は寒いという四季のあり方が正しいものとされる。逆に正しくないのは「伏陰愆陽」（同）というように，夏寒く冬が暖かい状態である。この正しさの基準は，万物の生成が周到に行われるか否かにあると言える。たとえば夏にふさわしい暑さ，冬にふさわしい寒さが備わることは，植物をはじめとした命あるものを養う条件となる。これが崩れれば実るべき米が実らず，咲くべき花も咲かないのである。[9] ここから「天の道」とは，四季の巡りに代表される生成の「道」であることが分かる。もっと言えば「陰陽」は,「天」における生成の働きである。「天之為道也，唯有陰陽，陰陽之外更無別物」（p.398）というように,「天」においてその生成の働きを為すものは「陰陽」のほかなにもないのである。[10]

「陰陽」が生成を掌る「天の道」であることが分かったが，それでは「天」や「陰陽」というとき, どのようなありようをイメージすればいいのだろうか。この点について益軒の,『易経』繫辞下伝の「形而上者謂之道, 形而下者謂之器」（『易経下』p.246）における「形而上」「形而下」の文言解釈に即して考えてみることとする。益軒はまず，この部分の「上下」を単に天と地として解釈し,「天者在上地者在下，故以上下」（『大疑録』巻之下p.398）と言う。そしてさらに「形」とは「有体質」（同），すなわち具体的な物質的なあり方と性質を持つことであるとする。では「形より上」もしくは「形より下」とはどういうありようを指すのか。ここでは先に「形より上」の方に着目するが，この点について益軒は次のように述べる。

蓋形而上者，謂陰陽之気，無形而在天，是在万物形器之上者，故謂之形而上者，象者，形之精華発於上者也，以其気在上而見，謂之成象（同p.398）

ここで重要なのはまず,「陰陽」が形あるものとしての万物の上にあることである。これは先にも見たように,「陰陽」が「天」という上にあることを意味している。次に注目したいのは,

「象」という概念である。この箇所の「象」は，『易経』繫辞上伝「在天成象，在地成形」（『易経下』p.211）に基づいている。また「象」のありかたについて益軒は，同じく『易経』の「見乃謂之象，形乃謂之器」（同p.241）を踏まえて説明している。「象」は具体的な物質の形や性質をなすものではなく，あくまで「見（あらわ）」れるものである。上の引用では「形之精華」が上すなわち「天」に発現したものであると説明されるが，「象」とは具体的な「形」の発現の原初形態であり，その「形」の真髄をなすものなのである。この，「形」の真髄が現れている状態という「象」というあり方が，「陰陽」のあり方にほかならない。つまり「天」という「上」にある「陰陽」は「形」を持たず，ただ「象」というあらわれでもってその生成の働きを顕現しているのである。その「見（あらわ）」れについて益軒は，「流行変易」（『大疑録』p.398）するところが「露顕」（同）しているにすぎないと述べる。しかしこの「気象露顕耳」（同）という文文言には否定的なニュアンスはない。明確な「形」を持たないにせよ，「陰陽」は無窮に運動し変化し，その働きを明示している。その働きは「化生於万物」（同），すなわち万物の生成に結実するのである。ここにおいて，さきの「形之精華」の意味が一層明白となる。「陰陽」の無窮の運動という現れは，秩序ある万物の生成そのもののはたらきなのであり，それが万物を覆う「天」で行われているのである。「形より上」とは，厳密には「形」ある万物の上にあるの謂いにほかならないのである。

なお益軒がここで「形」に拘るのは，「陰陽」をも「形」あるものすなわち物質的なものとみる朱子学に対する批判のゆえである。では「形」とは何か。これは上記の『易経』繫辞下伝に照らせば「形而上」が「道」に対応するのに対し，「形而下」は「器」とされていることを踏まえると，分かりやすい。「道」は「陰陽」の流行という動きであり，「器」は「形器」という表現もされているように，固定した物質的なありようを指すと言える。このことは

> 形而下者，謂万物各成剛柔之形質而在地也，形者，象之体質留於下者也，以形質具而各有成，故謂之器（同）

という益軒の説明からも明白である。「形」とは「剛柔」といった各々の存在を規定する性質が固定した状態であり，しかも「地」にあるのである。「地」は「天」からみて下にあり，「形より下」とは厳密には明確な「形」を持つものとして万物が「下」の「地」にあるということを指すと言える。[11]「形」の固定性は「象」に秘められた「体質」のありようが実際に発現し，固定したありように「留」どまったとあることからも，読み取ることが出来る。万物の展開の要素をうちに秘めつつもダイナミックに流動変化する「天の道」と，その働きを受けて具体的な多様な「形」を展開する「地の道」，という構図になっているのである。

益軒は，朱子学が論じるように「陰陽」が「形而下」のものであり，「道」ではなく「器」

に過ぎない[12] ならば，説明がつかないことがあると言う。益軒は「陰陽」が「形」あるものならば「象」の説明がつかないという。すなわち「天」にある「象」は，具体的な物体である「日月星辰」のみを指すことになるという。[13] この解釈では先に見た益軒が「象」にこめた万物の「形」の「精華」，もしくは万物生成の働きという面がすべて，そぎ落とされてしまう。むろん朱子学では全ての現象の背後に「理」を考えるため，朱子学においては整合性が取れる。しかし益軒は根本に全ての原理としての「太極」（＝「理」）を置いていなかった。「陰陽」の働きの正しい筋道こそが「道」であった。つまり益軒は「陰陽」を純粋な物質的な要素に還元することに異を唱えるのである。

このことは，益軒が「形」あるものを「山河」「大地」「人物」（同）といった目に見える具体的かつ固定的なもので説明していることと呼応している。益軒において「陰陽」は，具体的な形を持つものではなかった。その点で「陰陽」は，造られた具体的な万物との間に一線を画したものとされている。それはあくまで，万物をあるべきかたちに整える働きの「見（あらは）」れであった。その働きは無窮に変化する「生成」の働きであった。その意味で「陰陽」は，万物を成り立たしめるものであり，その「形」の基である。しかしそれは，人間をはじめとした万物の，単なる物質的な組成要素ではない。

こう考えてくると，「陰陽」があくまで「道」とされることの重要性が再び想起されてくる。「陰陽」が生成の働きを展開させるものであるとして，その動きには筋道が存在するということになる。前にも述べたがその筋道とは，首尾良く生成を成り立たせることであったと言える。これは言い換えれば，「陰陽」そのものに規範性が存しているということでもある。

それでは，その規範性とは何であろうか。この問いに答えるためには「陰」と「陽」各々の性質，及び両者の関係について明らかにする必要がある。次節ではこの点について，別のテキスト「陰陽論」（『自娯集』所収）に即して考察する。またそれに加え，そうした「陰陽」と向かい合うべき人間存在のありようについて『養生訓』の言説を通して考えることとする。

三，「陰陽論」（『自娯集』巻之一）及び『養生訓』における「陰陽」

前章では，「陰陽」が持つ「生成」という働きにおける規範性の存在に言及した。それでは，そのようなものとしての「陰」と「陽」は，各々どのような性質を持つものとして位置付けられているのだろうか。

『自娯集』所収の「陰陽論」でもまず，「陰陽」の働きは「生」であるとされる。[14] そして益軒は，先に見たように「陰陽」はそもそも「一気」であるとし，それを「元気」（「陰陽論」p.191）と呼ぶ。「元気」と呼ばれるゆえんを益軒は，「万物資始資生」（同）と説明する。つまり全ての存在を生じさせ，「生」かしていく根本的な働きを担うからであると言う。「陰陽」は存在の

根拠であり，かつ存在を一定のありかたで保持するものなのである。「天地日月四時鬼神万物皆因茲而立焉」（同）というように目に見えるものから観念的なものにいたるまでこの世界のありかたを「元気」としての「陰陽」が支え，規定しているのである。ここに「陰陽」の規範性を見て取ることができる。

ところで，「陰陽」を個々に独立した要素としないことは益軒の世界観の根幹であり，またその点こそが朱子学と益軒とを分かつところであった。「陰」と「陽」は分立しつつも相互の役割を持ち相互に支え合い，「生」という一大事業を展開するものであった。ここで注意したいのは，「元気の分」（同）として「分立」する「陰」と「陽」とに各々の方向性もしくは性質があることが示される点である。あるいは厳密には「元気」のある側面を「陽」，また別の側面を「陰」としているとした方が正確かもしれない。益軒は「元気之流行之為陽。凝聚之為陰」（同）であるとし，「元気」が動いて変化する側面を「陽」，静かに凝り固まる側面を「陰」であると規定する。この各々のありようはそのまま，各々の傾向をも規定している。益軒は，

> 以其陽言之。不流行則不能生長。是以陽気貴流行而悪閉塞。以其陰言之。不凝聚則不能静養。是以陰気貴凝聚而悪発散。（「陰陽論」p.191）

というように，「陽」の「流行」は万物が成長していく様を貴び，逆に停滞する様を嫌うものであるとする。このことは「陰」にもあてはまる。「陰」の場合は逆で静かに凝り固まることがよしとされる。ここから，「陰」と「陽」とがそれぞれ貴ぶものと嫌うものとを持ち，かつそれらが対になるものとされていることが分かる。これは，各々の役割分担があるということであるとも解釈できる。そして分担された役割が周到に遂げられることこそが，各々のなす「流行」と「凝聚」によって支えられる大きな「生」の営為の成就に繋がるのである。

このことを益軒は，人の身を例えにして説明する。人は昼間運動し，夜は休息してこそ健やかに生きられる。「偏動則労。偏静則則塞。（中略）偏動偏静非所以養體也」（同）とあるように，各々の働きは大切であるけれどもそれが偏ることは身体の養いを阻害する。身体の養いとは身体を「生」かすことである。いきすぎた「陽」と「陰」の働きは，人間存在を生かすどころか損なってしまう。それは万物においても同様であり，世界全体の秩序が守られるとは万物が生かされることにほかならない。これを踏まえて益軒は，「天地之道陰陽両備而後行焉。陰陽相須而生焉。故陰陽不可相無」（同）と述べる。すなわち「陰陽」は両方あってこそ「生」を為すのであり，どちらも欠けてはならないのである。

このことはさらに，四季の運行をみれば一層明らかである。第1章でも夏が夏にふさわしい暑さを，冬が冬にふさわしい寒さがあることが正しいこととされたことに触れた。その正しさは，「陰」と「陽」とが各々の担う性質を発揮することでなされると言える。「陽」は「流行」

し「生」を基準にして,四季のうちの春夏を担当する。万物の生成は「春生之気」(同)による。春に万物は芽生え，夏に向かって成長する。一方，秋冬は「陰」による「殺」の働きが隆盛となる。「秋殺之気」(同)により万物は死滅に向かう。むろんこの場合の「生」と「殺」は組み合わさりながら各々の働きを示すのであり，それ自体には価値序列を読み込む必要は無い。もとより四季は円環的な巡りであるため，春夏の「生」と秋冬の「死」が循環し，一つの大きな「生」の営為を為していると言える。「生」のみあるいは「死」のみでは，四季においてもたらされる大きな「生」―「生」と「死」とが相対的に組み合わさるものとししての「生」ではなく，その仕組みを覆いそれらによって成り立つところの包括的な「生」―は成り立たないのである。

しかしながら一方で益軒は,「陽」と「陰」の性質に対して，一見優劣の価値基準のようなものを持ち込んでいるように見える。というのは，益軒は続く箇所で「天道好生而悪殺」(同)と述べているからである。この「生」を包括的で大きな「生」であると解釈することも可能であるが，明らかに「生を好み，殺を悪む」というように「天道」の傾向性そのものが「殺」と対になる「生」という方向性で語られている。さらに益軒は，この「生」と「殺」に対応するものとして君子と小人を持ち出す。この君子と小人の組み合わせ自体に，そもそも優劣の序列が組み込まれている。「君子法之。故君子之道貴陽而賤陰。易以陽属乎君子。以陰属小人。」(同)というように益軒は，君子は「天」が好む「生」に則り,「陽」を貴び「陰」に価値を見いださないという。その根拠は,益軒自身が言うように『易経』の文言にある。「陽一君而二民,君子之道也。陰二君而一民，小人之道也」(『易経』繫辞下伝pp.260-261)というように，君子の道が「陽」の卦，小人の道が「陰」の卦に各々対応させられている。この文言での君子の道が「国家の正しい道」(同p.261),小人の道が「国家の乱れた状態」(同)と解釈されるように,君子・小人の概念は世界の秩序が保たれるか否かを示していると言える。世界の秩序が保たれることはとりもなおさず「生」である。この「生」を貴ぶことが「陽」を貴ぶことによって成り立つのである。世界の秩序の保持を望むのは，小人ではなく君子である。さらに言えばそれを体現できるのも君子に他ならない。世界の「生」の成就は，君子によって望まれ，また担われるのである。

この点を踏まえ，君子が「陽を貴び，陰を賤しむ」理由をさらに見ていくと，ことは一層明白となる。

> 否泰剥復所以明進退消長之理也。陽盛陰衰則於時為泰。於年為豊。於人為康寧。是造化之運平直。而天地之道所以行也。苟陰盛陽衰則於時為否。於年為凶。於人為疾病。是造化之運不正。而天地之道所以或幾乎息也。故雖陰陽不可相無。然亦於其中有淑慝之分。是以君子之道貴陽賤陰。易道之所以立也。(「陰陽論」p.191)

ここでの「否」・「泰」・「剥」はそれぞれ八卦の名である。「否」は「否塞, ふさがって通ぜぬこと。陰陽和せず」(『易経　上』p.162) ということ[15],「泰」は「安泰・通泰」(同p.156) のことであり,「陰陽相和する時期」(同) を指すという。[16] さらに「剥」は,「剥ぐの意味である。柔（陰）が進んで剛 (陽) を変えてしまう」(同p.222) [17] とされている。「泰」が良い状態であるのに対し,「否」と「剥」とはマイナスの状態であると言える。

この三つの流れを「進退消長之理」としていることから，益軒が「否」や「剥」といったマイナスの状態を排除しようとしているわけではないことがわかる。そういう状態があるのは一つの筋道なのである。物事には須く「進退消長之理」があり，それは不可避である。いわばそれは，物事のありようを規定している「理」である。しかしその「理」の存在を認めながらも益軒は,「陽」が盛んとなり「陰」が衰えるありようを重んじる。「否」は作物が実らぬ凶年をもたらし，人においては疾病を意味する。いずれも生命エネルギーが殺がれることを指す。それは「陰」が盛んで「陽」が衰えている状態である。その状態を益軒は「正しからず」とする。それが正しくないのはまた,「流行変化」すべきありようが「息むに幾（ちか）し」，すなわち生成の動きが停滞している状態だからである。

とするとその裏返しの「泰」，すなわち「陽」が盛んで「陰」が衰えている状態は作物が実る豊作となり人が心身共に安らかに過ごせる状態で, これが「正しい」ということになる。「進退消長」の流れは避けられない。その過程で「陰」が強まり，主導権を持つときも存する。しかしその状態が続いて大いなる生成の働きが滞るのは，のぞましくない。その中で君子は,「陽を貴び陰を賤しむ」というありようを選択し目指すべきなのである。またその選択は,「進退消長之理」の理解を前提として成り立つと言える。その理の把握は言い換えれば,「雖陰陽不可相無。然亦於其中有淑慝之分」ということを知ることでもある。この知を踏まえた上で「陽を貴び陰を賤しむ」ことを選び取り実践していくことが，生成を主とする「天地之道」にほかならないのである。

以上から,「陰」と「陽」のうち「陽」が優越性を持ち，かつ主導権を握ることがのぞましいという価値基準を読み取ることが出来る。誤解を恐れず言えば，ここに君子のありようを説明に組み込むことによって益軒が，人間存在の踏むべき道筋を示していると解釈することも可能である。そこではやはり, 正不正, のぞましいのぞましくないという価値基準が,「天地之道」の大いなる生成と重ね合わされて生きているのである。

しかしあくまで留意すべきなのは,「陽」にいくら重きが置かれるとはいえ,「生」という事業は「陽」のみでは成り立たないという点である。「陰」と「陽」との序列を踏まえつつ,「偏」を避けることが重要なのである。ここに「陽を貴び陰を賤しむ」もしくは「陽を盛んにし陰を衰えさせる」こととはまた別の，規範性を見出すことが出来る。それは，バランスという視点である。

益軒はこの，「陰」と「陽」がいずれにも偏らず，バランスが重要である点について，別の小論で「中正」という概念を用いて補強している。「夫陽舒陰惨而天地之化行矣。苟偏乎一気。則造化之道不行矣。人必亦然」（「以礼楽治性論」『自娯集』巻之一p.190）というように，益軒は「陰」と「陽」がいずれかに偏れば天地の生成・養育の営為も上手く立ちゆかないと考える。そしてそれは，人間にも同様であると益軒は言う。引用した小論「以礼楽治性論」の主旨は，聖賢の教えによって人間存在の性質の偏りを「中正」にするものが「礼楽」である（同）[18]ということであり，その主要テーマは厳密には「陰陽」ではないが，ここで重要なのは，偏らぬ「中正」により世界や人が正しくなるとされることである。そして「陰」と「陽」とのバランスが「中正」に保たれることは，先に見たその運行が正しいことが「道」であるという言説，すなわち「一陰一陽之謂道」（『易経』繫辞上伝）ということと内容的に直結する。つまりここでの正しさとは「中正」というバランスのよさを指す。「陰陽」もまたこの価値軸によって成り立つものと言える。人間存在に即せば，その生が「礼楽」によって正しくバランスの取れたものとなることが，理想的なものであると説明しうる。「中正」こそが天地万物，及び人間の存在としてのふさわしいあり方なのである。

以上のように，「陰」と「陽」は確かに優劣概念で語られる部分もあった。しかしそれと不可分な形で，同時に各々のバランスと各々の連動関係が語られていることに注目すべきである。つまり「陰陽」は単純な優劣関係ではなく，ものを生み出し養うという，より超大な働き，―メタ生と称することも可能であろう―を成し遂げるための関係において成り立っているのである。

このことはさらに，「陰陽」が人間存在を生かす「気」であるという観点から見ると，それは単に人間存在の組成であるというのみならず，人間存在自らが主体的にその「陰陽」と取り組む必然性をも導き出す。この点について，自身の心身を天地から受けたものとして養生することが人間存在の義務であると説く[19]『養生訓』を少し見てみよう。人間は自らを生かす「元気を養ふ」（『養生訓』巻第一p.34）ことを目指すべきであるが，その秘訣は「気血」を滞らせず「流行」（同p.40）させることである。その際益軒は，人間存在内部の営為を天地の営為と対比させながら説明する。

> 陰陽の気天にあつて，流行して滞らざれば，四時よく行はれ，百物よく生る。偏して滞れば，流行の道ふさがり，冬あたたかに夏さむく，大風・大雨の変ありて，凶害をなせり。人身にあっても亦然り。気血よく流行して滞らざれば，気つよくして病なし。気血流行せざれば，病となる。（中略）此故によく生を養ふ人は，つとめて元気の滞なからしむ。（同p.40）

つまり天地の営為と人間の営為とは「気」において連動しており，質的に同じ構造を持つと

言える。ここでは「気」が滞るか否かが問題となっているが，この流行して止まざるものとしての「気」の性質を正確に掴むことが,「気」を滞らせないための肝となるのである。そこで「気」はさらに,「陰陽」の観点から分析されることとなる。

益軒は人間内部の「気」について,「陰陽」の観点から次のように語る。

> 天地の理，陽は一，陰は二也。水は多く日は少し。水はかはきがたく，火は消えやすし。人は陽類にて少く，禽獣虫魚は陰類にて多し。此故に陽はすくなく陰は多き事，自然の理なり。少なきは貴く多きはいやし。君子は陽類にて少く，小人は陰類にて多し。易道は陽を善として貴とび，陰を悪としていやしみ，君子を貴とび，小人をいやしむ。水は陰類なり。暑月はへるべくしてますます多く生ず。寒月はますべくしてかへつてかれてすくなし。春夏は陽気盛なる故に水多く生ず。秋冬は陽気衰る故水すくなし。血は多くへれども死なず。気多くへれば忽死す。吐血・金瘡・産後など，陰血大に失する者は，血を補へば，陽気いよいよつきて死す。古人も「血脱して気を補ふは，古聖人の法なり」といへり。人身は陽常にすくなくして貴とく，陰つねに多くしていやし。故に陽を貴とんでさかんにすべし。陰をいやしんで抑ふべし。元気生々すれば真陰も亦生ず。陽盛なれば陰自長ず。陽気を補へば陰血自生ず。『養生訓』巻第二 pp.61-62）[20]

ここでも益軒は，天地と人間とを貫く一つの原理を用いて説明する。その原理とは,「陽」が少なく「陰」が多いことである。この多寡は各々の存在の優劣にも直結する。「陽」は少ないが故に貴く,「陰」は多い故に賤しいのである。それは天地であれ人間存在の内部の状態であれ，同様である。重要なことは，この事実に基づき，貴ぶべき「陽」を盛んにし，いやしむべき「陰」をおさえるという姿勢が「べし」という当為でもって示されることである。つまりこれが，人間存在における養生の肝であった。

それでは養生においては，単純に貴ぶべき「陽」をできるだけ多くし,「陰」をできるだけおさえて少なくすべきなのだろうか。先に見た「陰陽論」においても，人間存在の疾病は「陰盛陽衰」(「陰陽論」p.191）というように，おさえるべき「陰」が多くなることによるとされていた。しかしここで注意したいのは,単純に「陰」をおさえるという話ではないことである。むしろここでは逆に,「元気生々すれば真陰も亦生ず。陽盛なれば陰自ずから長ず」(『養生訓』巻第二 p.62)とあるように,「陰」と「陽」は連動するものとして描かれている。端的には「陰陽」の「中正」なバランスがここで目指されていると推測しうるが，重要なことは人間存在のなすべきこととして「陽」にもっぱら対処すること，すなわち「元気」を養うことが示されている点である。「陰をおさえる」といっても,「陰」に直接働きかけてそれをコントロールしたり完全になくそうとすることを意味しない。ここに,「陰」と「陽」とが織り成す真の関係性

が浮かび上がる。つまり,「陽」を増やせば「陰」も増えるのである。むろんその増え方は,「陽」との関係性において適正さを保った増え方である。ここでの増減は単純な多寡を指すのではないと考えられる。「陽」は人間が直接働きかける対象ではあるが，人間の作用は「陽」のみにとどまるのではない。「陽」への働きかけは「陰」にも作用を及ぼす。「真陰」が「生」じること, もしくは「陰」がおのずから「長ず」ることとは, 単純な増減や多寡ではなく, 適正な「陽」のありように連動した適正な「陰」の作用を表すのである。この箇所から益軒が, 人間存在が「陽」の気，すなわち「元気」を養生することの重要性とともに，それが適正な「陰」の気のバランスの確保につながる営みであることを示そうとしていることがうかがわれる。「陽」への着目は正しい「陰」の確保をも意味する。貴くて少ない「陽」への着目はしかし，兼ねてから確認してきた優劣の問題に留まるものではなかった。人間は自分の心身を対象とする際,「陰陽」の多寡とそれゆえの働きかけの肝をおさえるべきであった。その働きかけの肝を知り，ミクロコスモスとしての自己存在と主体的に向き合うことが人間に目指されている。その肝は「陽」を好むことであったと言える。それは「君子」が「陽」を好むものであり，その姿勢こそが世界の秩序の保持につながるからである。

そしてここからは再度,「陽」が重視されているようには見えるものの,「陰」と「陽」との「中正」というありようこそに焦点が当てられていることが確認できる。とすると，自らの心身において「一陰一陽」という「道」の働きを正しく顕現させる主体としての人間存在が，浮かび上がってくる。そうした存在こそが「君子」，すなわち人間としてふさわしいありようを為す存在なのである。

そしてその「中正」を為すことこそが，人間存在と「天」との連続性をも意味する。それはむろん，自らの心身に対峙するありようのみを指すのではない。「生」という一大事業に参与することの自覚，すなわち天地人の「三才」の一としてある自覚を人間存在自身に促す営為であるとも言えよう。

四，今後の課題

以上最晩年の書物をもとに，益軒の捉えた「陰陽」概念について簡単に考察した。「陰陽」は人間存在をはじめとした万物の正しいありようを形成するものであった。その正しさは「生」の成就を意味していた。その際益軒は,「陰」と「陽」とを各々成り立つ存在に即して優劣の価値基準で位置付けると同時に，両者のバランスが保持されることそのものを重視した。究極的には「陰陽」は,「生」という価値において位置付けられることが確認できた。そして人間存在は，万物の中でも天地を父母とし天地の働きを内在させ，それを十全なかたちで発揮する存在であるとされた。つまり，その内なる「陰陽」と主体的に向き合うことが人間としてふ

さわしいありようとして示された。この点は，「生」に関わるマクロコスモスとしての天地と，ミクロコスモスとしての人間存在との関係を如実に表すものと言える。

以上の考察をもとに目論んでいるのは，一章でも触れたマクロコスモスとミクロコスモスとしての天地と人間存在との関わりを明らかにすること，及び拙稿「開きゆく「知」―『大疑録』をもとに―」で言及した，人間存在をはじめとして万物を覆う大いなる気運としての秩序について明らかにすることである。[21)]

前者については『養生訓』を介して多少触れることが出来たが，内在する超越に対して人間存在が自らを自覚的にいかにして位置付けるのかという問題についてはまだあまり深められてはいない。内なる「陰陽」の働きを見つめる「養生」はそれを考察する良い契機ではあったが，さらなる精査を必要とするであろう。

また後者については，「陰陽」の働きが「天の道」であるということ，その根本的な働きが生成であること等が手がかりとなりうるが，まだ端緒に触れたにすぎない。

いずれにせよ，益軒における『易経』理解などをはじめとして，益軒自身の立ち位置をその著書の精読を通じて確認していく必要があろう。

注

1）益軒の位置付けについては拙稿「開きゆく「知」―『大疑禄』をもとに―」『富山大学人文学部紀要』第 75 号 pp.17-36 においても，先行研究を踏まえつつ言及した。

2）たとえば益軒が学びの姿勢において聖人を信じることに主眼を置いていた点は，古学の基本的なスタンスに通じると言える。この点に関しては，前掲の拙稿において詳述した。

3）『大疑録』はまさに益軒が亡くなった年，1714(正徳 4) 年に成立している。『大疑録』が大上段から構えて朱子学を裁くようなものではなく，自らを継いでいく後世の学者の知見に委ねるといった姿勢を見せていることに関しては，前掲書でも指摘した。念のために一カ所益軒の言を引いておくと，「於此姑記所疑惑，以望識者之開示而已，何可敢自是而与先正抗論乎哉」（『大疑録』序 p.388）というように益軒は謙虚な姿勢を見せている。これは，尽きせぬ真理に向かう者が持つべき真摯な姿勢を体現するものとも言える。なお本稿での『大疑録』からの引用は，『大疑録』荒木見悟　井上忠校注『貝原益軒　室鳩巣』（日本思想大系 34）岩波書店 1970 所収の原漢文による。意味を取るにあたっては適宜，同書所収の読み下し文も参照した。

4）『自娯集』は 1712（正徳 2）年成立。『自娯集』が編まれた最晩年の益軒の学びについて，たとえば横山俊夫氏はその 3 年前に書かれた『楽訓』とこの書について「『楽』や『娯』は，彼の特別な関心事であり続けた」（横山俊夫『貝原益軒　天地和楽の文明学』平凡社 1995p.27）と述べ，益軒の学びの体系における「楽」や「娯」が占める位置の大きさを指摘する。また松田道雄氏は『楽訓』について「益軒の晩年の心境をもっとも忠実にしめす」（責任編集松田道雄『貝原益軒』中央公論社 1983p.18）ものであるという。本稿でもこれらの先行研究を受け，「楽」や「娯」の概念が益軒の学の集大成，もしくはその大系を貫く柱であるという立場をとる。このような『自娯集』の位置づけについては，拙稿「貝原益軒『自娯集』巻之二「国俗論」「本邦七美説」解釈（『日本倫理思想史研究』第 15 号富山日本倫理思想史研究会 2014 年 pp.23-32）においても少し言及した。また「楽」そのものについての考察は，拙稿「貝原益軒における「楽」について」（『富山大学人文学部紀要』第 35 号 2001 年 pp.1-19）で行った。なお「陰陽論」をはじめとする『自娯集』所収の小論からの引用は，益軒會編纂『益軒全集』巻之二益軒全集刊行部（1911）所収のものによる。引用の際は旧字体を新字体にする等，適宜改めた箇所もある。

5）『易経』からの引用は，高田真治，後藤基巳訳『易経　上』及び『易経　下』岩波書店 1969 による。本文の解釈については，同書の解釈を参考にした。

6）「道」を「道路」のようなものとして，そこから抽象性を捨象する捉え方はたとえば伊藤仁斎にも見られる。仁斎はその主著『語孟字義』巻之上「道」の条で「道猶路也。人之所以往来也」（『語孟字義』p.121 吉川幸次郎　清水茂校注『伊藤仁斎　伊藤東涯』日本思想大系 33 岩波書店 1971 所収）と述べ，道とは人が行き交う道路のようなものであるとし，抽象的・観念的な解釈をしない。

7）「故以混沌時，名之謂太極，以流行之言［時］，名之謂道，太極与道，其実一也」（『大疑録』巻之下 p.403）なお朱子学では，陰陽の働きの背後に「太極」=「理」の存在を想定する。益軒は「太極」=「理」を終始否定し，理気二元論も採らない。この辺りの議論は「理」と「気」を二分する考えを否定する流れとなっている。

8）益軒は『易経』説卦伝の「立天之道，曰陰与陽」を引用し，「陰陽」を「天の道」であるとするが，そのゆえんを「道」の解釈を通して説明する。その説明については本文で論じる。

9）温暖化が叫ばれる今，将来的に日本が米の生育に適さない気候になり得ることや，冬の適度な寒さがなければ桜が咲かないことなどを想起すれば，ここでの「正しさ」と「生」との結びつきが一層具体的に描けるだろう。

10）続く「陰陽」の解釈にも関わるが，この「陰陽」の背後に「太極」という「理」の働きを設定するのが朱子学である。益軒はこの立場を取らず，「陰陽」そのものの働きに規範性を見出す。いずれにしても益軒の論は，理気二元論批判に帰着していく。

11）益軒は「器」についても『易経』説卦伝「立地之道，曰柔與剛」（『易経下』p.288）に基づき，「是在

地成形，而有剛柔之質矣」（『大疑録』p.398）と説明している。「器」とは剛柔というような具体的でほかに変わることがない固定的な性質を保持していることなのである。

12）「程朱以陰陽為形而下者，是分道与陰陽為道二也，蓋程朱分気与理，理為道，陰陽為器，相対而説」（同）。こう述べた上で益軒は，こうした朱子学の説を疑うとし，五つの点に分けてその疑義を説明していく。五つの点については，同 p.398 参照のこと。

13）「苟以陰陽為形而下，則在天成象者，只日月星辰而言邪」（同）

14）益軒は「陰陽論」を「天地大徳曰生」（『易経』繫辞下伝『易経下』p.251）および「一陰一陽之謂道」（『易経』繫辞上伝　同 p.220）の引用で書き出しており，これらの解釈に基づき論を展開する。

15）「人道の正常な状態ではない。」（高田真治　後藤基巳訳『易経　上』岩波文庫 1969p.163）と説明されている。つまり物事が全て滞っている状態である。

16）「人事をもって言えば，君臣上下の意志疎通し国家安泰ならんとする時」（『易経　上』p.157）であり，このとき「君子はこれにのっとって天地之道を財成（裁成に同じ，布を裁って衣服を作り成すように，素材を有用の物にしあげること）し，天地の宜（義）を輔け助けて，民衆の生活を助成する」（同）とも説明される。「泰」はすなわち世界の秩序が安定している様を指すが，「陽」のみで成り立つというのではなく「陰陽」が「相和」していることが注目すべき点であろう。「君子」が主導権を持ってはいるが，その上下が保たれ，「相和す」ことにより，物事が上手く運ぶのである。

17）「剥」については「小人の勢いが盛んとなり君子を剥害する時にあたる」（同 p.221）とされ，君子は自らの行動を慎重にすべきである時であると説明される。

18）「嗚呼人之資質難得中正。故聖賢之教設也矯揉偏性。救其過失。而令帰乎中正而已矣」（「以礼楽治性論」『自娯集』巻之一 p.190）

19）このことはたとえば『養生訓』巻第一冒頭の文章，「人の身は父母を本とし，天地を初とす。天地父母のめぐみをうけて生れ，又養はれたるわが身なれば，わが私物にあらず。天地のみたまもの（御賜物），父母の残せる身なれば，つつしんでよく養ひて，そこなひやぶらず，天年を長くたもつべし」『養生訓』巻第一総論上 p.24）からも明白に読み取れる。なお『養生訓』からの引用は石川謙校訂『養生訓・和俗童子訓』岩波書店 1961 所収のものによる。

20）以下ここでは具体的に薬の処方についての説明が続いている。

21）拙稿「開きゆく「知」―『大疑録』をもとに―」『富山大学人文学部紀要』第 75 号 pp.17-36 参照。